

# 内部質保証のために学修時間の質・量を向上させる仕組み

## データに基づく検証システム（IR）と組織的な改善活動の試行

橋本智也（京都光華女子大学／EM・IR部）

本研究では、内部質保証を進めるために、学生の学修時間を質・量ともに向上させる組織的な取り組みを試行した。その具体的な分析方法と対策のための実施体制を報告し、データに基づく検証システムの確立と組織的な状況改善が内部質保証へどのように貢献するかについて議論する。

大学には、質を伴った学修時間の増加・確保と、組織的に改善を継続させる体制が求められている。しかし、その実現に向けた分析方法、組織的な取り組み方について、研究の蓄積が十分ではない。そこで、本研究では、学修時間を分析し、学内で組織的に状況を改善していく具体的な方法を報告する。

### 背景

大学には能動的な学修を促す学士教育課程への転換が期待され、**質を伴った学修時間の増加・確保が求められている** [1]。また、教育の質の監視と向上についての大学内部の仕組みである**内部質保証の体制が求められている** [2]。

### 教員の想定と学生の実態

学生の学修時間が適切かどうかを検証するためには、**学生の学修時間の実態調査だけでは不十分**であり、**教員が担当科目にどのくらいの学修時間を想定しているか**について分析を行う必要がある [3]。

### 全学的な実施に向けての試行

全ての科目を対象にして分析を行う前に、**一部の科目について試行**することによって、全学的な実施に拡大させるにあたっての進め方や検証の観点、調査方法などを検討した（図1）。



図1：全学的な実施に向けての試行

### 方法

1週間あたりの授業時間外の学修時間について [A：教員の想定] と [B：学生の実態] を比較した。データは [A：FD委員会の教員へのアンケート] と [B：学生による授業評価のデータ] を使用した。

### 学内で組織的に共有・議論

部分的な分析結果であることを前提にしつつ、学内で組織的に共有し（図2；値はイメージ）、**課題量の適切さや科目の体系性などについて改善のための議論を行った**。また、議論の結果を踏まえ、全学的に実施するかを検討している。

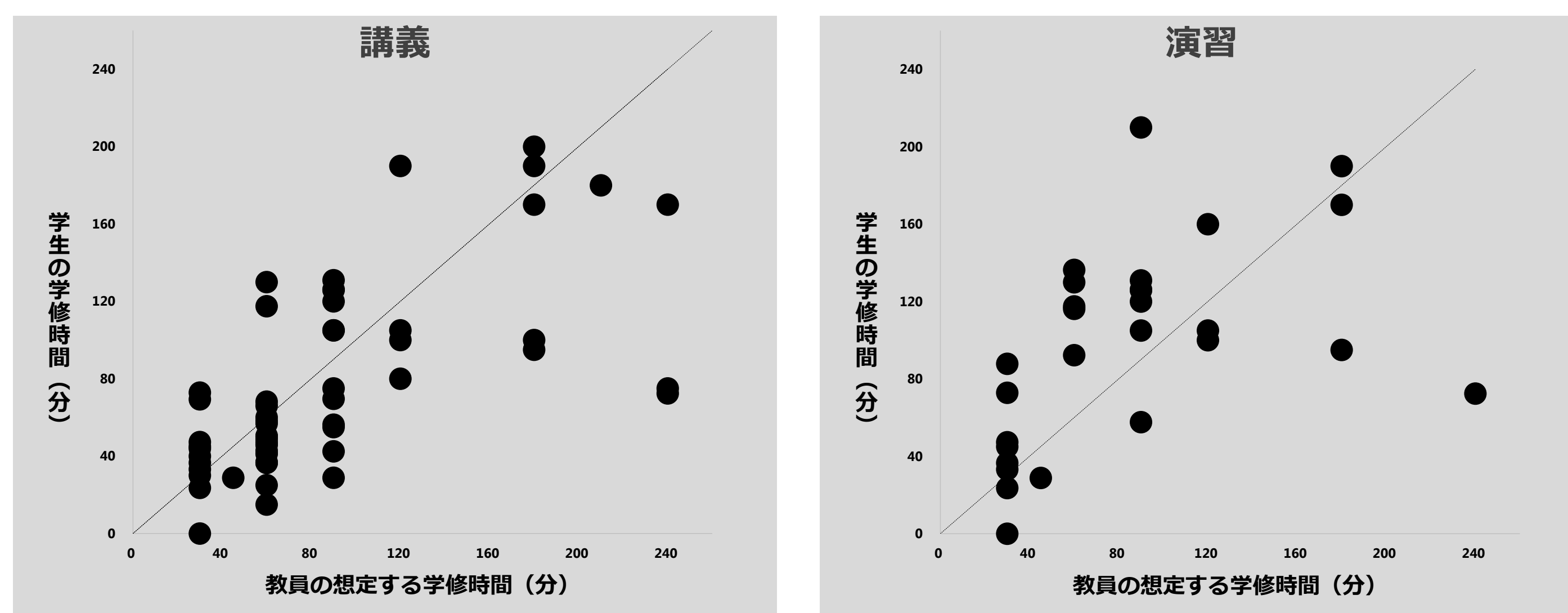


図2：[教員の想定する学修時間] と [学生の学修時間]

今回の分析手法は、内部質保証の体制整備に向けて、**質を伴った学修時間の増加・確保を組織的に推進させることに寄与するとともに、多くの大学で応用が可能**と考えられる。

[1] 中央教育審議会（2012）．新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）

[2] 大場淳（2009）．フランスにおける高等教育の質保証 羽田貴史・米澤彰純・杉本和弘（編著）高等教育質保証の国際比較 東信堂 pp.177-195.

[3] 三好登（2013）．大学生の学習成果に関する研究動向と今後の課題 大学論集，44，303-318.

